

場所・面積

大阪府大阪市、0.8 ha

管理目的

積水ハウスのグローバルビジョン「『わが家』を世界一幸せな場所にする」の実現のため、事業として取り組んでいる環境取組の一つである生物多様性に配慮した庭づくりの取り組み「5本の樹」計画の実践の場として、地域の生物多様性保全に貢献することを目的としている。また、地域住民の憩いや環境教育、レクリエーションの場として利用してもらうことも目的の一つ。

サイト概要

新梅田シティの公開空地に創設した「新・里山」（約8000㎡）は、「3本は鳥のために、2本は蝶のために、地域の在来樹種を」という思いを込めた「5本の樹」計画に基づき、2006年に再造成された。都心にいながら約100種500本を超える中高木や200種以上の草花が咲き乱れる里山の原風景を望むことができる。生物多様性に配慮した循環型管理手法も奏功し、絶滅危惧種を含む40種以上の野鳥や50種を超える昆虫類など多くの生き物が確認されるなど、豊かな生態系が育まれている。オフィスワーカーや近隣住民、観光客などにも「憩いの場」として親しまれ、都市の自然を介した地域コミュニティの場としても活用されている。



土地利用の変遷

元々は工場跡地であった場所に1993年梅田スカイビルと共に、当初は「花野」としてオープン。その後「5本の樹」計画が2001年からスタートしたことを受け、その実践の場として2006年に「新・里山」へリニューアルし、現在に至る。

サイト周辺の環境

JR大阪駅から徒歩10分ほどの大阪都心部に位置しており、周辺にはオフィスビルなどが多い。サイトの北側には淀川が流れている。

アピールポイント

高木はコナラやクヌギなど、日本の原種や在来種を中心に植栽している。そのために、雑木林を利用できる野鳥や昆虫が多くなり、生態系が安定している。剪定や除草残渣についても通常の公園のようにゴミとして処分してしまわずに場内で堆肥化する他、減農薬の有機植栽管理など「環境配慮型植栽管理」を実践している。野菜作りの一部は、専門家の指導の下で、ボランティア活動の参加を呼びかけている。節分用の大豆や芋など、参加した人たちにとっては、収穫の喜びはもちろん、環境や季節感、「食」について学習するきっかけにもなっている。

生物多様性の価値

価値（４）生態系サービスの提供の場であって、在来種を中心とした多様な動植物種からなる健全な生態系が存する場

【場の概況】

都心にいながら約100種500本を超える中高木や200種以上の草花が咲き乱れる里山の原風景を望むことができる。生物多様性に配慮した循環型管理手法も奏功し、多くの生き物が確認されるなど、豊かな生態系が育まれている。

【主な植生】

クヌギ、コナラ、シラカシ、アラカシ、ヤマボウシ、ヤマザクラ、ヤマハギ、サンショウ、ヤブランなど

【確認された主な動植物】（いずれも2021年、新里山敷地内での踏査によって確認）

アオスジアゲハ（学名： *Graphium sarpedon* 成体）
ヤマトシジミ（学名： *Zizeeria maha* 成体）
ジャコウアゲハ（学名： *Byasa alcinous* 幼体）
ナガサキアゲハ（学名： *Papilio memnon Linnaeus* 幼体）
チョウゲンボウ（学名： *Falco tinnunculus* 成体）
モズ（学名： *Lanius bucephalus* 成体）
ヤマガラ（学名： *Sittiparus varius* 成体）
メジロ（学名： *Zosterops japonicus* 成体）
シロハラ（学名： *Turdus pallidus* 成体）
ハクセキレイ（学名： *Motacilla alba lugens* 幼体）
カワラヒワ（学名： *Chloris sinica* 成体）



写真の撮影年月：2016年4月26日

写真の説明：北側からの俯瞰写真（都市部にある里山）



写真の撮影年月：2016年4月26日

写真の説明：里山内の雑木林

生物多様性の価値

価値（8）越冬、休息、繁殖、採餌、移動（渡り）など、地域の動物の生活史にとって重要な場

【場の概況】

新里山内の樹林地で、地域住民なども多く訪れている

【対象となる動物種】

メジロ（学名：*Zosterops japonicus* 成体）
2018～2021年、主に冬期に新里山敷地内での踏査によって確認

イソヒヨドリ（学名：*Monticola solitarius* 成体）
2020年と2021年、主に冬期に新里山敷地内での踏査によって確認

【動物が利用している生活史】

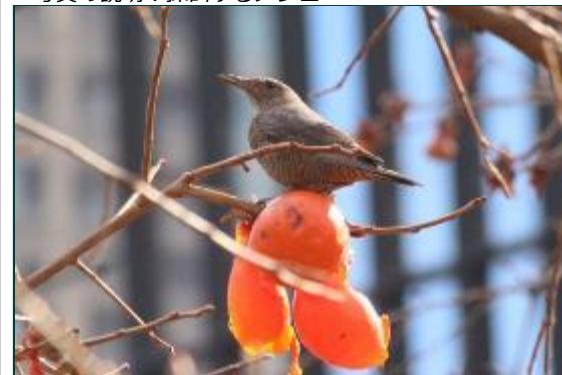
採餌、休息、移動など

メジロは季節によって個体数が大きく変化し、冬は10～20羽規模の群れで移動しながら採餌する様子がよく見られた。冬季は特に柿の実やツバキ類の花蜜、春はサクラの花蜜を好んでよく訪れた。
イソヒヨドリは春の繁殖期及び冬期に確認された。



写真の撮影年月：2021年1月15日

写真の説明：採餌するメジロ



写真の撮影年月：2021年1月29日

写真の説明：熟柿を食べるイソヒヨドリ

サイトの管理計画・モニタリング計画

管理計画の内容	モニタリング計画の内容
【管理計画の内容】 ※基本的に常駐管理をしている 植栽管理（年1回程度の自然樹形を崩さない枝抜き剪定、約2年に1回の施肥、日々の巡回による目視点検と捕殺作業を主にした病虫害防除、年4回の除草、年20回の自動灌水と適宜死角箇所の手灌水、適宜枯死木の捕植や支柱の追加などの保全業務） 田畑栽培・維持管理（年1回もち米・うるち米、年6回野菜を栽培し、里山の景観を創る。原則、無農薬栽培を行い、収穫よりも里山全体の生態系や多様性を優先する） 畦芝管理（年5回、機械及び手刈にて生態系のバランスを崩す可能性のある植物のみ取り除く） 下草管理（年4回、機械及び手刈にて自然が損なわれない程度に下草を刈り込み、里山の景観を創る） ため池管理（年6回、植栽の間引き・捕植・清掃を行い、池の水位維持調整と水生植物の生育を助ける） バタフライガーデン管理（年5回、整姿剪定・播種・捕植・手刈除草を行い、景観維持と蝶や昆虫のハビタット空間の維持をする） 堆肥作り（年2回の落葉等の搬入、年5回の堆肥置場の天地返し・腐葉土敷き込みを行い、植栽エリアに堆肥として使用する）	【モニタリング対象】 鳥類、蝶類 【モニタリング場所】 新里山全体 【モニタリング手法】 踏査による目視または鳴き声による識別、及び捕獲 【実施時期及び頻度】 （過去実績） 鳥類：（2017～2021年、年1回程度 2021年は29回） 蝶類：（2014～2021年、年1回程度 2021年は25回） 今後の予定：3年に1回程度（春と秋の年2回） 【実施体制】 積水ハウス及び連携団体

⁷² World Economic Forumの発行レポート「The Future Of Nature And Business」より、種水ハウスグループと環境性の高いビジネス領域を世界とした情報。

積水ハウス Value Report 2023（統合報告書）抜粋 <https://www.sekisuihouse.co.jp/company/financial/library/annual/>

Value Report 2023
SEKISUI HOUSE



長期ビジョンとマテリアリティ

価値創造の仕組みと原動力

持続的成長のための中間経営計画

ESG経営の実践

G:ガバナンス E:環境 S:社会

財務データ・会社・株式情報

153

潜在的な自然への影響・依存評価の概要

積水ハウスグループでは、2021年度の調達データ¹⁾をもとに住宅事業における潜在的な影響と依存評価をENCOREをベースに実施し、ヒートマップの形で表しました(図1)。分析の結果、原料調達工程において、多くの生態系サービス(水供給・自然資源・土壌調整・洪水緩和・気候調整など)に依存している可能性があることを把握しました。また、木材の伐採や鉱物資源の採掘における陸域・淡水域・海域への土地改変や大気・水質・土壌・廃棄物の汚染など潜在的な自然への影響があることも把握しました。

重要な原料の一つである木材については、当社は以前より重視しており、サプライヤーの協力のもと、木材調達ガイドラインに基づくスコアデータや調達データ²⁾から伐採国レベルで森林面積ベースの生物多様性影響に関するインパクト評価を実施しました。その結果、調達量の大きい日本や北欧と比較すると、マレーシアやインドネシアなどの東南アジア地域における広葉樹は調達量が少ないながらも、影響が比較的大きいことを再認識しました。すでに実施している木材デュー・ディリジェンス³⁾を今後さらに強化するとともに、インパクト評価をさらに精緻化していくことで持続可能な木材調達を強化していきます。

事業	工程	影響														依存			
		土地改変				資源採取				汚染				気候変動		水供給		自然資源	
		陸域	淡水域	海域	水	水以外	GHG	大気	水質	土壌	廃棄物	その他	水供給	その他	自然資源	水調整	土壌調整	気候調整	洪水緩和
住宅事業	原料調達																		
	製造加工																		
	建設																		
	解体																		

図1 住宅事業における自然資本への潜在的な影響・依存評価(ENCOREなどのツールによる分析結果をもとに作成。オレンジ色が強い(負)影響、緑色が強い(正)影響を示す)なお、原料調達において、複数の原料や調達プロセスが関係しているため、自然への影響や依存関係の表色により高く評価されたものを採用すること、悪影響とみなさないよう配慮しました。

今後に向けて

今年度は住宅事業を中心に全体感を把握するための評価を行いました。今後は今回実施したLEAPアプローチに沿った初期的な評価をさらに精緻化した分析を行い、実態をより把握できるようデータ収集・分析体制等を整備していくとともに、評価対象を他の事業にも拡大し、事業全体における自然資本への影響と依存、リスクと機会を把握できるように努めていきます。

また、自然関連リスクと機会に関しても、今後最終提言が発行されるTNFDフレームワークに沿った開示に向けて、自然関連シナリオを反映した優先リスクと機会の特定や財務への影響等を加味した分析・協議を行い、リスクと機会に対する対応の方向性を検討していきます。

「5本の樹」計画の定量効果測定や、持続可能な木材調達などの既存取り組みに加え、今後は「5本の樹」計画の居住者の自然に対する態度・行動および健康など自然関連取り組みの社会的側面の効果検証など新しい領域にも積極的に取り組んでまいります。

¹⁾ 木材は、2次サプライヤー以降までを対象とした調達データ。木材以外の原料については調達データ、調達データをもとに一般設計データより主要原料量を推定しています。

²⁾ → R148 [4. 指標及び目標]

³⁾ → R147 [3. リスク管理]

リスク低減と機会創出につながる自然関連の取り組み

▶【機会の創出の取り組み例】「5本の樹」計画の生物多様性効果検証

琉球大学理学部久保田研究室の協力のもと、生物多様性保全に関する定量的な実効性評価をマクロな視点で分析する共同検証を2019年より開始しました。「5本の樹」計画が生態系の劣化が激しい都市部において生物多様性の回復に貢献できること、今後計画を拡大することでさらに効果が大きくなることがわかりました。周辺生態系への貢献とともに快適な暮らしを提供するこの取り組みは、都市の生態系への貢献はもちろん、弊社のブランド価値創出に貢献しようと考えています。



→ R149 [5. 活動・その他関連情報]

▶【リスクの低減の取り組み例】持続可能な木材調達

伐採地の森林環境や地域社会に配慮した木材・木材製品「フェアウッド」の調達に取り組んでいます。調達にあたっては、合法性はもとより伐採地の生態系などを視野に入れた「木材調達ガイドライン」10の指針を設定しています。持続可能な調達の取り組みは資源の効率性の観点で弊社のリスクレジリエンスを高めることに貢献すると考えています。

→ R147 [2. 戦略] R148 [4. 指標及び目標]



事務局からの補足説明（地域戦略について）



- 大阪市では、2021年3月に生物多様性地域戦略（大阪市生物多様性戦略）を策定しています。
- 生き物の生息・生育空間である生態系ネットワークの拠点の創出という地域戦略の具体的な施策として、積水ハウスの新梅田シティ 新・里山が言及されています。

めざすまちの姿

具体的施策

めざすまちの姿

生物多様性の恵みを感じるまち

目標

- ◆生物多様性の保全と持続可能な利用（※1）を促進します。
- ◆生物多様性の保全のため、市民・環境NGO/NPO・事業者・研究機関・教育機関・行政など多様な主体との連携・協働を推進します。
- ◆自然や生き物を身近に感じる市民の割合（※2）を50%以上にするとともに、生物多様性保全に貢献する取組を行う市民等を増やしていきます。

※1「生物多様性の保全と持続可能な利用」とは、豊かな生物多様性を保全し、その恵みを将来にわたり享受できる自然共生社会の創出
※2「自然や生き物を身近に感じる市民の割合」とは、都市にいながらみながら自然や生き物と関わりを感じることができる市民の割合

課題

自然との
関わりの
低下

主に田畑や
草地などに
住む生き物
の減少

消費が
生物多様性に
及ぼす影響
の増大

都市・
地球環境
の変化

取組み

基本戦略A 生物多様性の発見と行動の展開

- 方針Ⅰ：身近なところでの生き物・植物の発見
- 方針Ⅱ：自然体験を通じ、身近な都市の魅力としての気づきを得る取組
- 方針Ⅲ：環境教育・啓発

基本戦略B 自然空間の保全・創造

- 方針Ⅰ：生物多様性の保全
- 方針Ⅱ：生き物の生息・生育空間である生態系ネットワークの拠点（エリア）の創出
- 方針Ⅲ：生態系ネットワークの形成と広域連携の取組

基本戦略C 生物多様性に配慮した生産・消費への変革

- 方針Ⅰ：暮らしと生物多様性の関わりを発信
- 方針Ⅱ：民間事業者の生物多様性の取組の促進
- 方針Ⅲ：生物多様性に配慮した生活への変革

基本戦略D 都市・地球環境問題に対する取組み

- 方針Ⅰ：都市環境問題に対する取組
- 方針Ⅱ：地球温暖化に対する取組
- 方針Ⅲ：国際貢献

大阪市の強み・資源を活かす

- 1 市内の貴重な資源
- 2 新たな生息・生育空間
- 3 周辺エリア・世界とのつながり
- 4 関連施設の集積
- 5 事業者・環境NGO/NPOなど多様な主体間のつながり、取組の展開
- 6 市民や事業者の活動に支えられた大きな消費市場
- 7 世界に貢献できるネットワーク、技術・知見の蓄積

方針Ⅱ 生き物の生息・生育空間である生態系ネットワークの拠点（エリア）の創出

都市公園や公共施設などの公共空間におけるみどりだけではなく、住宅や、屋上・壁面も含めた民有地での緑化は、市内を流れる淀川や大和川、さらには琵琶湖、生駒山など周辺エリアの豊かな自然と相まって、生き物の生息・生育空間を連続的に広げていくことにつながります。そのため、事業者、市民などと連携して、生き物の生息・生育空間の拠点（エリア）となる自然環境の整備を進めます。

【具体的施策 No.23】

取組み	「おおさか生物多様性パートナー協定制度」の活用を促進し、事業者との連携を強化します
内 容	大阪府は「おおさか生物多様性パートナー協定制度」を活用し、事業者の生物多様性保全活動を促進しています。大阪府も大阪府と連携して制度のPRに取り組みとともに、情報発信や生物多様性に関するイベントの企画・実施などで事業者との連携強化に取り組みます。
関係所属等	環境局

おおさか生物多様性パートナー協定制度

「おおさか生物多様性パートナー協定制度」とは、民間事業者の生物多様性保全活動を支援するため、大阪府が創設した協定制度です。民間事業者の生物多様性保全活動を促進するため、活動内容の認証やホームページによる活動紹介、大学・試験研究機関などの専門機関による研究成果を活用した学術・技術的な支援を実施しています。

2014年度に協定締結した積水ハウス（株）では、大阪駅前の新梅田シティにて「新・里山」の取組を行っています。ここでは、日本の原風景「里山」をお手本とした庭づくり「5本の樹」計画に基づき、地域の在来種を中心に雑木林や田畑を設け、公開空地として一般公開されています。



新梅田シティ「新・里山」